

はじめに

大阪・上町台地から、都心居住の真価を問うていきたいとの思いを原点に、まちづくりの実践者と研究者などのネットワーク型組織として誕生した「上町台地からまちを考える会」。第一話ではその背景を簡単に紹介し、可能性を展望していくための入り口とした。続く第二話では、同会の今年度事業の一つとして二〇〇四年二月に開催された、まちの学校・上町四方山話シリーズ「てらまち極楽ストーリー」で提起された論点を紹介しながら、これ

大阪・上町台地発
都心居住文化の創造へ
(第3話)

実践と理論の 協働関係が紡ぎだす まちづくり

「つづいたコミュニティのあり方、まちづくりの究極の課題に向き合う方法を考え、試みを重ね、次の世代に受け渡すまちづくりを考えていくことこそ、上町台地からまちを考える会の使命である」と同会理事の高田光雄氏は語っている。事実、背景の異なる者同士が自律的にネットワーク組織を形成し、個々の関係を発展させながら地域の資源力、コミュニティ力、市民力を育んでいくことを目指す、「上町台地からまちを考える会」のあり方は、まちづくりの究極の課題を乗り越える可能性を探ろうとしているものといっていだろつ。

弘本 由香里

written by Yukari Hiromoto

からの都心居住のあり姿を展望するうえで、歴史・文化の連続性に向き合う本質的な意味とは何かを探った。

前回・第二話の終わりに概括したとおり、寺町固有の歴史・文化に向き合うことから導きだされたものは、他者との関係性への眼差しであり、背景の異なる者同士が対話をし、価値観の対立をいかに乗り越え、主体間の境界を相対化し、組み替え、再編していくかという、まちづくりの究極の課題そのものであった。同イベントの最終回に講師として登場した加藤政洋氏は、「共移体」共異体としての「コミュニティ」「社会を構想する街」というキーワードを提示した。

中でも注目すべきは、上記の課題に向き合うことを使命とする同会の組織や事業のダイナミズムが、まちづくりを実践する個々の現場及びその担い手と、組織やまちづくりを研究する大学・大学院などの研究活動及びその担い手との実践的な協働関係によって、豊かに紡ぎだされ耕されてきているという点である。

そこで、連載第三回目の今回は、実践と理論の現場を介した協働関係が、どのような成果を上げ、将来に向けてどのような価値を持つものであるのか、今年度取り組まれた優れた研究の紹介を中心にしながら眺めてみたい。

実践と理論の協働関係の展開

ところで、まちづくりの現場が研究のフィールドになること自体は、決して珍しいことではない。ユニークな取り組みが行われている地域や特徴的な課題を抱えた地域は、多くの大学・大学院などのゼミの対象とされ、学生・院生が地域に入り込んで調査にあたっている。調査をもとに、卒業論文・修士論文・博士論文が執筆されるケースも多い。例えば、「上町台地からまちを考える会」の関係団体を見ても、空堀商店街界隈での「からほり倶楽部」の活動にしろ、寺町界隈での「應典院寺町倶楽部」の活動にしろ、これまでに数々の学生・院生たちが研究対象としてきている。

しかし、「上町台地からまちを考える会」に関わる研究活動が際だっているのは、研究主体である学生・院生と会との関係の深さ・豊かさにおいてである。単なる研究者と研究対象、あるいは組織とボランティア・スタッフといった関係ではなく、むしろ会の一員として主体的に会の活動を担い、内部・外部両者の視点を持って、実践と研究の双方を深め、実践の現場に有効な理論をフィードバックしていくこと。それこそが研究の目的であり成果であるという志向を抱いて、会とそこに参画する学生・院生が自律的な協働関係を築いているのである。

こうした実践と理論の協働関係が自律的に機能してきた背景には、実践から生成力のある理論を紡ぎだす、グループ・ダイナミックスを専門とする渥美公秀氏（大阪大学大学院人間科学研究科助教授）や、建築学を専門とし価値観の対立を乗り越えるまちづくりのあり方を探究する高田光雄氏（京都大学大学院工学研究科教授）が、「上町台地からまちを考える会」の理事であり、かつ協働的实践を旨とする研究者としてのポリシーを持って会の運営に関わ

っている縁がある。また（財）大学コンソーシアム京都の研究主幹であり大阪大学大学院の博士課程（渥美研究室）の山口洋典氏が、まさに自身の協働的实践の場として「上町台地からまちを考える会」に関わり、同会の二代目事務局長として、次世代のまちづくりの担い手を育成し、まちづくりの現場に新しい人材を導入する流れを形作るプロセスが存在していることも大きい。

二〇〇四年度、学生・院生による協働的实践の成果としての論文が三本まとめられた。前記の山口洋典氏による博士論文『ネットワーク型まちづくりのグループ・ダイナミックス』（長縄跳びの着想に基づく組織化プロセスの研究）と、京都大学大学院工学研究科修士課程（高田研究室）の尾形圭一氏による修士論文『コモンズの視点から見た「場所」の持続的利用に関する研究 上町台地周辺を対象として』と、大阪大学人間科学部四回生（渥美研究室）の山本由佳子氏による卒業論文『つながりのデザイン まちづくりネットワークにおけるピア・デイスカッション』である。

以下、個々の研究に敬意を表しつつ、関係者としての多少の感想を交えながら個々の論文の一部分を紹介していきたい。実践と理論の協働関係が紡ぎだす可能性を感じとっていただければと思う。

場所と活動をつなぐ視点

尾形氏の修士論文『コモンズの視点から見た「場所」の持続的利用に関する研究 上町台地周辺を対象として』



「上町台地からまちを考える会」ホームページ



コモンズの視点から見た「場所」の持続的利用に関する研究
上町台地周辺を対象として

尾形圭一（京都大学大学院工学研究科修士課程）

第1章 序論

- 1-1. 研究の背景・目的
- 1-2. 既往研究
- 1-3. 研究の方法と構成

第2章 都心居住における場所の利用

- 2-1. 本章の目的
- 2-2. 場所
- 2-3. 場所利用の意義
 - 2-3-1. 場所を利用した活動
 - 2-3-2. 都心居住者にとっての場所利用の意義
 - 2-3-3. 都心の魅力創造にとっての場所利用の意義
- 2-4. 小結

第3章 コモンズの視点から見た場所の利用・管理モデルの検討

- 3-1. 本章の目的
- 3-2. コモンズ概念の基礎的検討
 - 3-2-1. 既往研究に見るコモンズ概念
 - 3-2-2. 本研究におけるコモンズ
- 3-3. 場所の利用・管理モデル
 - 3-3-1. 共的な場所管理
 - 3-3-2. クローズドモデルとオープンモデル
- 3-4. 小結

第4章 都心居住者による共的な場所の持続的利用の検討

- 4-1. 本章の目的
- 4-2. 対象地域の概要
 - 4-2-1. 下寺町界限
 - 4-2-2. 空堀界限
 - 4-2-3. コリアタウン界限
- 4-3. コミュニティ・ネットワーク
- 4-4. 調査概要
- 4-5. C.N.を志向したコミュニティ活動における場所の利用・管理
 - 4-5-1. 下寺町界限：應典院寺町倶楽部
 - 4-5-2. 空堀界限：からほり倶楽部
 - 4-5-3. コリアタウン界限：コリアNGOセンター
 - 4-5-4. 上町台地周辺地域：上町台地からまちを考える会
 - 4-5-5. 共的管理の有効性
- 4-6. 都心居住者による共的な場所の持続的利用の方向性と課題
 - 4-6-1. 界限単位のC.N.を志向したコミュニティ活動の特徴
 - 4-6-2. 考える会のC.N.を志向したコミュニティ活動の特徴
 - 4-6-3. 共的な場所の持続的利用の方向性と課題
- 4-7. 小結

第5章 結論

- 5-1. 結論
- 5-2. 今後の研究課題

は、「コモンズ(複数の主体)によって利用され、共的に管理される資源とその持続的利用システム」という概念を導入し、私的、公的ではない、共的に「場所」の持続的利用を実現する可能性を持つものとして、上町台地周辺地域で展開されているコミュニティ・ネットワークを志向したコミュニティ活動を考察した研究である(尾形)。上記考察を通して、都心居住者による場所利用の促進、場所の持続性向上に対する共的管理の有効性を明らかにすること、活動を通じた場所の共的管理の実現・拡大及びコミュニティ・ネットワークの意義に関する特徴の抽出から、都心居住者による共的な場所の持続的利用の方向性や課題を検討することを目的としている(尾形)。

筆者は、尾形氏の論文が、「上町台地からまちを考える会」の誕生から現在に至る活動の流れの中で、次の二点に

おいて大きな示唆と価値を付与するものと感じている。一つは、第一話の中でも少し触れた、同会の発足の引き金となった、都市公団(現在の都市再生機構)の筆ヶ崎地区整備事業の検討における、「上本町コミュニティ・ネットワーク(C.N.)構想」との関係においてである。尾形氏の論文は、同構想が描いていた、コミュニティ・ネットワークの意味を掘り下げ、現実のまちづくりの中で、その価値を持続的に発揮していくための道筋として、都心における場所の共的管理という視点から具体的な検討を試みている。つまり、場所づくりの一つである空間的な開発行為と、活動のネットワークというソフトの仕掛けが、都心において結びつく必然性と意義を、都心居住者という人間存在を中心に据えながら、一つの文脈の中で、一体的に理論化し語り上げている点である。

もう一点は、都市と社会の持続可能性のために、ストック・マネジメント型のまちづくりとは、いったいどのようなもので、どのように取り組んでいけばよいものか。社会全体が直面しているといっても決して過言ではない大きな問い、言葉では簡単に言い表せても、実際にその道筋を探るのは容易ではない重い課題に対して、一つの方角性を探り、指し示そうとしている点である。

尾形氏は、共的な管理によって、都心居住者による場所利用が促進されること、及び場所の持続性を向上させることが確認されたとした上で、都心居住者による場所の持続的利用の方向性として、次の点を挙げている。第一に、界限内部の活動主体が単独で場所の管理主体に加わるコミュニケーション活動だけでなく、外部の活動主体との協働により複数の活動主体が場所の管理に加わるコミュニケーション活動が連動して展開されることが望ましいこと。第二に、内部の活動主体と外部の活動主体の協働を促進していくために、コミュニケーション・ネットワークによって活動主体間の協働を促進することが有効であること(尾形)。また、課題として次の点を上げている。第一に、活動で利用する場所に既存の利用・管理主体との競合を調整すること。第二に、活動主体内の個人負担を低減すること。第三に、地域の活動主体が、外からの活動主体と場所との関係を密にすること。第四に、コミュニケーション・ネットワークにおいて、外部の活動主体を受け入れる体制を整備すること(尾形)である。

事業の可能性を拡張する視点

尾形氏の研究から導きだされた、活動主体間の協働の促進や外部の活動主体を受け入れる体制の整備にもつなげる視点として、一つの場所と事業に着目した考察と提



つながりのデザイン

まちづくりネットワークにおけるピア・ディスカッション

山本由佳子(大阪大学人間科学部4年生)

- 第1章 はじめに
 - 1-1. まちづくりという視点
 - 1-2. ネットワークという視点
 - 1-3. ピア・ディスカッションという視点
- 第2章 本研究の目的・研究方法
 - 2-1. 研究の目的
 - 2-2. 研究の方法
- 第3章 上町台地からまちを考える会 エスノグラフィー
 - 3-1. 会の構成
 - 3-2. 会の成り立ち、目指すもの
 - 3-3. 100人のチカラ! という事業
- 第4章 まちづくりのピア・ディスカッションとしての「100人のチカラ!」 理論的考察
 - 4-1. 「まちづくり」の観点からみた100人のチカラ!
 - 4-2. 「ネットワーク」の観点からみた100人のチカラ!
 - 4-3. ピア・ディスカッションの観点からみた100人のチカラ!
- 第5章 まとめ 結論と実践的提言
 - 5-1. 100人のチカラ! 運営への実践的提言
 - 5-2. 今後の展望 わたあめ製造機のメタファーを用いて

言を行っているのが、山本由佳子氏による卒業論文『つながりのデザイン まちづくりネットワークにおけるピア・ディスカッション』である。

山本氏が研究対象としたのは、「上町台地からまちを考える会」が二〇〇四年一〇月から実施している、「一〇〇人のチカラ!」という事業である。二週間に一度開かれるゼミオープンの勉強会で、考える会の八人の理事が毎回交替でゲストを呼び、ゲストの活動に関するテーマをもとに「ピア・ディスカッションを行うというものである(山本)」。いわば、資源開発の一つの手法であり、ゲストが一〇〇人に達した時に、一堂に会することを目標に置きつつ、むしろ場の創出を重ねていくプロセスに可能性を見出そうとする取り組みでもある。

この「一〇〇人のチカラ!」を、山本氏は「まちづくり」「ネットワーク」「ピア・ディスカッション」という三つの

視点から丹念に考察し、まちづくりの「場」の創出を協働で行っており、特に参加者はそのことを意識せずに関画に参加できていること、考える会と同じ構造を持ったネットワークであり、その参加者の実践の質を高めるための共振作用を持つ実践として機能しているということ、まちづくりという共通項を持つ「仲間」の間でのピア・ディスカッションである、暗黙知を明白知に変える学びの場として機能していることが明らかにされた(山本)としている。グループ・ダイナミックスの理論にも触れながら、真剣な参与観察者の立場ならではの感想として、『「100人のチカラ!」は、研究者としての筆者自身、また当事者である現場の人々全てがその動的情報形成プロセスに実践的に関われるフィールドであった』(山本)と振り返っている。

上記の考察に基づいて、山本氏は「100人のチカラ!」という事業の可能性を拡張していく方策として、広範囲にまちづくりを盛り上げていく仕掛けとして、参加者の多様化とリピーターの獲得を戦略的に行うべきである、人材育成の仕掛けとして、「学びの場」としての「100人のチカラ!」に次世代のまちづくりの担い手たちを参加させるべきである、シナジー効果をより高めるために、理事による意識的な場のコーディネートがなされるべきである、という三つの実践的提言を導いている(山本)。その指摘は、ネットワーク組織としての「上町台地から考える会」が追求すべき事業の方向性や性格を指し示してくれているともいえるだろう。さらに山本氏は、次のようなユニークなメタファーを用いて今後の展望を物語っている。『「100人のチカラ!」は、まちにおいてどのような機能を担うことになるのだろうか。筆者はそれを、アイデアと人材のインキュベーターとしての機能だと考えている。』「100人のチカラ!」をわたため製造の「機

械」だと見立てたのは、そこにザラメを温め溶かす(インキュベートする)「熱」が生まれ、参加者の想いを溶かしあつて再構成するという「機会」になっているからである。様々な大きさや味のザラメは、『100人のチカラ!』という機械(機会)によって温められ、糸となって互いに絡み合い、新たな知としてのわたためを形成する(山本)と同時に、『100人のチカラ!』は、人材育成の仕掛けともなりうる。』「100人のチカラ!」に参加するまちづくりの未来の担い手たちは、議論から生まれたアイデアの実行主体としても活躍し、いっそう経験を積んで成長することができるだろう(山本)と。

関係性とネットワークキングの視点

「上町台地からまちを考える会」というネットワーク型組織を対象としているのだから、当然のことではあるが、尾形氏・山本氏両者の研究に徹底するテーマは、関係性とネットワークキングといつてもいいだろう。グループ・ダイナミックスの立場から、このテーマに徹底してこだわり、組織の形成と発展プロセスを約三年に渡って追っていったのが、山口洋典氏による博士論文『ネットワーク型まちづくりのグループ・ダイナミックス』(長縄跳びの着想に基づく組織化プロセスの研究)である。山口氏は、「上町台地からまちを考える会」の発足前史の段階から参与観察を始め、同会の立ち上げ期を支えた前事務局長の後を受け、二〇〇四年四月から二代目の事務局長に就任。ハビタント(外部参入者)の視点を得て、研究者かつ実践者としてネットワークキングの新たなモデルを実践的に構築、提示できれば(山口)との前向きな意思で重責を担っている立場でもある。



「上町台地100人のチカラ!」開催風景
(「上町台地からまちを考える会」事務所にて)

山口氏の研究のオリジナリティとその価値は、まちづくりの新たなパラダイムとして、ネットワーク型まちづくりの本質に光を当て、その実践の現場から担い手が共有する言説の構築を目指した点にあるのではないかと、筆者は受け止めている。ネットワークに参加する団体や個人が向き合っていく課題ごとに、それぞれの資源を持ち寄り、プロジェクトを立ち上げ実践していく。そうしたまちづくりの可能性に着目し、関係性の中から生まれてくる動的な組織のあり様を、一連の長縄跳びに見立てて可視的に物語り、実践現場を動かしていく理論としていた点に、これからのまちづくりの展望を開いていく、際立った眼差しと意思を見出すことができる。

山口氏は長縄跳びのメタファー(隠喩)を用いて、ネットワーク型まちづくりの動態を丁寧に物語っている。その要旨を山口氏自らがわかりやすく語っている大阪日日新聞コラム(二〇〇五年二月五日)の中から、一部を紹介しよう。

「このような活動のつながりや広がりやまとまりを、長縄跳びに見立ててみると、考える会では、参加する団体のリーダーや学識経験者らが、ときには回す人になり、ときには跳ぶ人になり、とその役割を適宜変えながら縄を回し続けている。一人でする縄跳びのための短縄を連結させて、長縄(大縄)を作ることもあるように、それぞれが持つ道具や発想をつないで、跳び方や回し方を考える。

ここでの縄は、組織の事業を指し、その軌跡こそが活動によって生み出される取り組みの成果となる。したがって、縄を跳ぶタイミングも重要だが、自分が縄に引っかけたりそうなどきには出るタイミングも重要になるし、跳ぶ人が少なければ回す人の熱意や努力も薄くなるように、跳ぶ人と回す人の両者の存在があってこそ長縄跳びが成立する。」(山口)

そして、「すべての長縄跳びがうまくいくわけではない。

むしろ、縄が止まった後、体制を整えて再び回し始めることが大切である」(山口)と。さらに論文では、長縄跳びに他者を迎え入れていく場面を借りて、ネットワーク型まちづくりにおける、共同性の相互承認の過程、その契機としての異質性の現前の問題に言及している。

「本研究は、まちづくりそのものの概念を深めているわけでもなく、NPOの組織論を検討したものではなく」と山口氏は語っている。裏返してみれば、既存の枠組みの延長で語られるまちづくりや組織論が、実践の現場で生み出される物語を生み出せなくなっているということかもしれない。まちづくりや組織論のパラダイムシフトの途上で、協働の実践から生成力のある理論を生み出す、グループ・ダイナミックスのアプローチによる可能性を、「長縄跳び」のメタファーは物語っているともいえる。事実、ハビタント(外部参入者)の視点を、山口氏が「上町台地からまちを考える会」に持ち込んだことによって、同会の組織と構成員は、諸々の困難にぶつかりながらも個々の問題を相対化し、新たな共同性を生み出す方向へと着実に自律的に軌道を描いてきた実感がある。山口氏による協働の実践がなした、計り知れないほどの貢献である。

次の世代へつなぐ視点

山口氏は論文の第一章で「本研究は、現場において展開される実践を『今後次の世代にどうつなげていったらいいか』という点に心えていくものである」(山口)と、その目的を明確に述べている。「上町台地からまちを考える会」内での世代間の経験や記憶の継承と、他地域への影響力という二つの側面があるが、現場の実践においては、年齢の違いや共通体験の有無などの違いがあることを前提に、相互に共同性を承認しあいながら新たな集合性に向

(山口洋典氏論文からイラスト転載)



長縄跳び(ネットワーク型まちづくり)の発展段階のイメージ
~どんな場所でもどんな長縄跳びをしているのかに気付く~



長縄跳び(ネットワーク型まちづくり)の初期段階のイメージ
~それぞれの短縄(事業)を持ちよって結ぶ~



ネットワーク型まちづくりのグループ・ダイナミックス
長縄跳びの着想に基づく組織化プロセスの研究

山口洋典 (大阪大学大学院人間科学研究科博士課程)

第1章 問題

- 1-1. はじめに
- 1-2. まちづくりの実践の意味
- 1-3. まちづくりの実践のネットワークング
- 1-4. グループ・ダイナミックスにおけるまちづくり研究

第2章 グループ・ダイナミックスとメタファー

- 2-1. 協働的実践に基づく理論の生成におけるメタファーの役割
- 2-2. メタファー使用に関する先行研究から
- 2-3. 組織研究とメタファー
- 2-4. 「長縄跳び」のメタファー導入

第3章 フィールドワークの概要

- 3-1. 上町台地という地域のまちづくりの概要
- 3-2. 上町台地からまちを考える会
- 3-3. 上町台地からまちを考える会と上町台地のまちづくり
- 3-4. 上町台地におけるハビタントとしての立場

第4章 上町台地におけるまちづくりの実践の組織化の過程

- 4-1. 組織の形成過程(2002.7~12)
- 4-2. 事業の形成過程(2002.12~2003.5)
- 4-3. 理事の役割分担(2003.6~8)
- 4-4. 事業の再構築(2003.9~2004.3)
- 4-5. 事業と組織の再構築(2004.2~2004.3)
- 4-6. 地域と拠点への関心(2004.4~12)

第5章 「長縄跳び」の集合流としてみた組織化の過程

- 5-1. 縄の同期が始まる：命名と愛着
- 5-2. 縄を連結：二次モード
- 5-3. 縄を交替でまわす：規範の伝達
- 5-4. 短縄を巻き長縄を纏う：リーダーの言説戦略
- 5-5. 縄の長さを調整する：ミッションからマニフェストへ
- 5-6. 縄の軌跡と跳躍の場への注視：場のマネジメント

第6章 意味創出としての組織化

- 6-1. グループ・ダイナミックスと「長縄跳び」のメタファー
- 6-2. まちづくりの実践と私
- 6-3. おわりに

き合っていくことが、世代を越えて経験や記憶が伝承されていくこと(山口)につながるという。また、上町台地から他地域への影響という面では、インターローカルで、インターローカルな実践が展開されるよう、新たに共同性の承認を促す機会を設けることが、次世代に「つながる」ための手がかりになる(山口)という。

先に紹介した尾形氏や山本氏は、「上町台地からまちを考える会」を研究対象としただけでなく、自ら主体的に会の活動に関わり協働的実践の担い手となることを通じて、次の世代や他地域への経験や記憶の継承の担い手ともなっている。

研究者が活動に関する情報の提供を受け協働を行いつつ、そこからの批判を活動にフィードバックすること、また、まちづくり活動を担う次の世代に知見として伝えていくことを、自覚的に組み込んだ活動主体である。従って、本研究も考える会の活動と不可分な関係にあり、完結した一つの研究であるが、ここから得られた知見は、地域データベース事業をはじめとする考える会の事業へフィードバックされるものである(尾形)。

その表明どおり、尾形氏が立ち上げた地域資源データベースは、「上町台地の資源・活動に興味のある人、またこれから活動を始めたい人が参照できるように、資源自身に関する情報のみならず、既存の活動においてそれら資源がどのように活用され、ネットワークされているかについての情報も網羅したデータベース。資源のリストであると同時に資源のガイドであることを目指す(尾形)も

のとして構想され、「上町台地からまちを考える会」のホームページ上で順次公開されていっている。

また、山本氏も論文の中で、「現場に対して実践的な提言や今後の展望を導くことこそが、本研究の大きな目的である」(山本)と語り、自ら示した提言を自ら実行するため、「100人のチカラ」の参加者のメーリングリストを立ち上げ、学生スタッフの手で毎回の内容のサマリーと次回の予告を簡単にまとめメルマガ風に配信する取り組みを開始している。

学生・院生等の主体的な事業への参画や研究を通じた協働の実践の軌跡が、ネットワーク型組織としての可能性を開発していく際の重要なファクターであることがあらためて確認できる。こうした自律的な実践を引き出し、受け止め、相互に影響しあいながら、新たな共同性を形作っていく力量が、組織運営の側にも問われていることはいうまでもない。また、学生・院生などとの協働的实践を、異質性を受け止め、経験や記憶を共有し継承する試行の一つと捉えれば、その先に新たな他者との共同性の創出に向けたまちづくりの展望も開かれてくる。

第三話の終わりに

限られた誌面の中で、非常に雑駁な記述になってしまったが、二〇〇四年度に「上町台地からまちを考える会」を対象にまとめられた三つの論文を紹介しながら、その協働的实践がどのような意味を持ち、将来に向けてどのような可能性を指し示してくれるものであるかを簡単に眺めてみた。

その意味や可能性を前向きに評価し、さらに拡張していく試行の一つとして、上町台地というフィールドにおいて、協働的实践のチャンネルを広げ新たな人材を迎え

入れていくこと、また研究活動を外部への具体的なプロジェクト提案に結びつけていくことを目指す試みを、現在立ち上げているところである。CEL(筆者)の研究活動の一環として、(財)大学コンソーシアム京都(研究主幹・山口洋典氏)をコーディネートに、複数の大学・大学院()の参画を得て、大学・NPO・企業が協働で実践する「上町台地コミュニティ・ビジネス研究会」を組織する。現場の主体として、上町台地からまちを考える会の参画及び関係団体の協力を得て、目下調査を展開中である。

新たな長縄跳びのチャレンジが、上町台地から豊かな都心居住と持続可能なまちづくりの展望を開いていくことを願うのでの取り組みとして。

(大阪ガス エネルギー・文化研究所客員研究員)
 () 京都精華大学(筒井洋一氏研究室)・京都大学大学院(高田光雄氏研究室)・同志社大学大学院(新川達郎氏研究室)・大阪大学大学院(渥美公秀氏研究室)

付記：本稿での紹介を快く了解してくださった、各論文の執筆者、山口洋典氏、尾形圭一氏、山本由佳子氏に心から感謝申し上げます。

エリア	資源	エリア	資源	エリア	資源
上町台地	上町台地公園	上町台地	上町台地公園	上町台地	上町台地公園
上町台地	上町台地公園	上町台地	上町台地公園	上町台地	上町台地公園
上町台地	上町台地公園	上町台地	上町台地公園	上町台地	上町台地公園

上町台地地域資源データベース
 (「上町台地からまちを考える会」ホームページから)